

【本号の掲載記事】

1. **第 33 回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウムのご案内**
—安全で適正な輸血・細胞治療を届けるために—
青森県立中央病院 副院長
会長 北澤 淳一
2. **認定輸血検査技師更新必須講座**
～自己免疫性溶血性貧血（AIHA）における臨床と輸血検査～
青森県立中央病院 臨床検査部
目黒 冬樹
3. **臨床輸血看護師の立場から見た輸血開始時認証の現状と課題**
— 未認証事象の実態調査を通して —
公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院 看護部
原 美樹子
4. **<全国各地の合同輸血療法委員会>**
秋田県合同輸血療法委員会の最近の取り組み
～災害・救急医療への即応と多職種連携がもたらす地域医療の均てん化～
秋田大学医学部附属病院 輸血細胞治療・移植再生医療センター
奈良 美保
5. **編集後記**
6. **一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会**

第 33 回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウムのご案内 —安全で適正な輸血・細胞治療を届けるために—

青森県立中央病院 副院長

会長 北澤 淳一

第 33 回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウムを、
2026 年 10 月 23 日（金）・24 日（土）の 2 日間、福島
県郡山市のビッグパレットふくしまにて開催いたしま
す。福島県での開催は、2012 年の第 60 回総会以来 2 回
目となります。今回は、2026 年度全国大学病院輸血部
会議も同時開催され、輸血医療に携わる多くの皆様にご
参加いただける機会となっています。



ビッグパレットふくしま

今回のテーマは「安全で適正な輸血・細胞治療を届けるために」といたしました。輸血・細胞治療を取り巻く環境は大きく変化しており、医療技術の進歩だけでなく、地域や施設の規模、医療資源の違いを越えて、患者さんに安全で適正な医療を届ける体制をどのように構築していくかが重要な課題となっています。本シンポジウムでは、さまざまな立場からこの課題について議論を深め、今後の輸血・細胞治療の発展につなげたいと考えています。

プログラムでは、地域医療における課題を取り上げた「島を守る・未来へ繋ぐ～みんなで考える離島輸血医療の解決策～」、「アフェレーシスにおけるトラブル・合併症対応の実際」、「小規模医療機関の輸血」、「ヘモビジランス・バイオビジランス」、「移植細胞療法における施設間・職種間の連携」など、現在の輸血・細胞治療を考えるうえで重要なテーマを取り上げます。

特に、離島や小規模医療機関における輸血医療をテーマとした企画では、地域によって異なる医療環境のなかで、いかに安全な輸血医療を維持していくかを考えます。また、アフェレーシスにおけるトラブル・合併症への対応、多職種連携、ヘモビジランス・バイオビジランスなど、安全な輸血・細胞治療を支える実践的なテーマについても議論します。さらに、CAR-T 細胞療法、血小板減少症、寒冷凝集素症、小児輸血など、近年の臨床現場で注目されているテーマについても、共催シンポジウムやランチョンセミナーを通じて幅広く取り上げます。

教育・研修に関する企画も充実しています。認定輸血検査技師更新必須講座、細胞治療認定管理師制度指定講習会に加え、国際交流活動「Pacific Connections」も予定されています。日々の診療や検査業務に役立つ知識を深めるだけでなく、輸血・細胞治療に携わる多職種・多施設の皆様が交流し、新たな連携を生み出す場となることを期待しています。

今回の開催地である郡山市は、東北地方の交通の要衝として、新幹線などを利用して全国各地からアクセスしやすい場所です。会場となるビッグパレットふくしまは、展示、会議、レセプションなどの機能を備えた複合コンベンション施設であり、今回のシンポジウムでは複数の会場を使用して多彩なプログラムを展開します。

そして、せっかく福島にお越しいただく機会ですので、学会だけでなく福島の魅力もぜひお楽しみいただきたいと思います。秋の福島は紅葉の美しい季節で、磐梯山、裏磐梯、五色沼、鶴ヶ城など、豊かな自然と歴史に触れることができます。郡山市周辺には温泉地もあり、学会終了後のひとときを過ごすにも適した季節です。

また、福島には多彩な郷土料理やご当地グルメがあります。福島市を代表する円盤餃子をはじめ、地元ならではの料理や果物なども楽しんでいただけます。郡山観光案内所の公式サイト(<https://www.kanko-koriyama.gr.jp/tourism/index2.html>)でも、観光地やグルメが紹介されています。

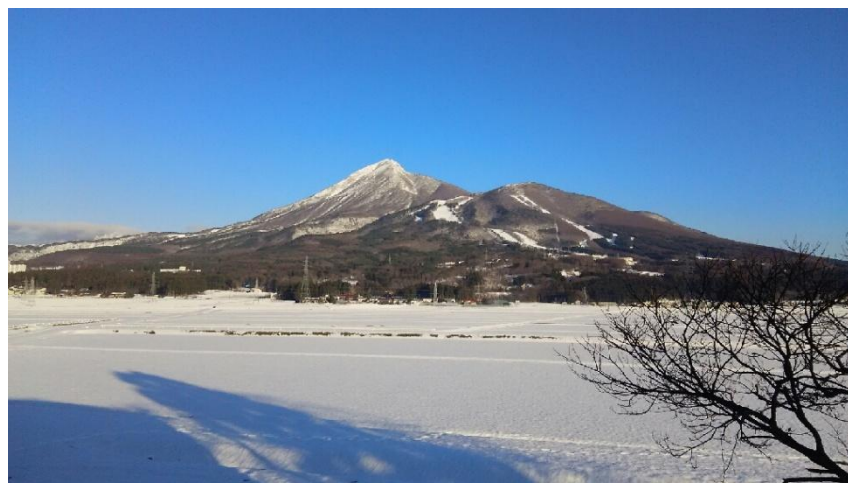
輸血・細胞治療の安全性と適正性をどのように高め、地域や施設の違いを越えて患者さんに届けていくか。本シンポジウムが、皆様とともに考え、語り合い、今後の医療につながる新たな一歩を踏み出す機会となれば幸いです。



ビッグパレットふくしま外観



五色沼と磐梯山



冬の磐梯山



認定輸血検査技師更新必須講座

～自己免疫性溶血性貧血（AIHA）における臨床と輸血検査～

青森県立中央病院 臨床検査部

目黒 冬樹

今回の秋季シンポジウムでは、認定輸血検査技師更新必須講座として「自己免疫性溶血性貧血（AIHA）における臨床と輸血検査」を企画しました。

自己免疫性溶血性貧血（autoimmune hemolytic anemia：AIHA）は、赤血球に対する自己抗体によって赤血球が破壊されることで貧血をきたす疾患です。通常、自己抗体はすべての赤血球に反応する汎反応性を示すため、不規則抗体検査や交差適合試験において、同種抗体の検出を困難にします。自己抗体の影響を踏まえた検査結果の解釈と適切な血液製剤の選択は、輸血検査を担う私たちにとって重要な課題の一つです。

本講座では、AIHA を「臨床」と「輸血検査」という二つの視点から取り上げます。

「臨床」パートでは、東京大学医学部附属病院輸血部の正本庸介先生より「AIHA の病態と診療—輸血医療における注意点—」と題して、AIHA の病態と診療を輸血医療との関連を踏まえて医師の視点から解説していただきます。

「輸血検査」パートでは、日本赤十字社東北ブロック血液センターの伊藤正一先生より「AIHA における輸血検査の戦略と実践—自己抗体解析と同種抗体見逃し防止の要点—」と題して、AIHA 患者から検出される自己抗体の解析や、自己抗体の干渉による同種抗体見逃しへの対策など、輸血検査技師が日常業務で直面する問題について解説していただきます。

輸血検査技師として、検査技術だけでなく、患者の病態と輸血医療を結びつけて考える力を身につけることは、より安全で適正な輸血医療を支えるうえで重要です。

AIHA の病態から輸血検査の実際まで、日々の業務に役立つ実践的な内容となっています。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。



臨床輸血看護師の立場から見た輸血開始時認証の現状と課題

— 未認証事象の実態調査を通して —

公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院 看護部

原 美樹子

当院は大阪市北区に位置する急性期の総合病院で、昨年度創立 100 周年を迎えました。“人の和で未来を創る”をブランドメッセージに掲げ、地域中核病院として最先端医療の提供をめざしています。輸血医療は、がん診療や造血幹細胞移植をはじめとする高度医療を支えるうえで、欠かすことのできない治療の一つです。



人の和で、未来を創る。
KITANO

私は血液内科病棟で輸血看護に携わり、臨床輸血看護師資格を取得しました。輸血看護では、血液型や同意取得状況の確認、製剤の照合、輸血ルートを選択、開始前後の患者観察、副反応への対応など、輸血前から終了後まで患者の安全を支える実践が求められます。輸血医療では、患者誤認や製剤の取り違えが重大な医療事故につながる可能性があるため、認証システムを用いた確実な確認と照合が重要であり、当院でも院内すべての輸血に認証システムを導入し、輸血開始時の認証を手順としています。しかし、実際の現場では認証が行われないうちに輸血が開始される場面を経験し、日常的に輸血を実施している環境では、安全確認が“慣れた作業”となり、手順の意味が薄れてしまうのではないかと危機感を抱きました。そこで、「なぜ認証が行われなかったのか」という疑問を明らかにするとともに、現場で感じていた課題を可視化し、安全対策につなげたいと考え、院内で輸血開始時認証に関する実態調査を行いました。

調査では、未認証のままの事象が輸血頻度に関わらず様々な部署で認められました。未認証となる理由は、認証機器トラブルや手順理解に関連した回答が多く、開始後に未認証を発見した場合の多くは事後登録のみで対応されていました。これらは、インシデント報告に至らない事例も多く、課題が表面化しにくい可能性が示されました。開始後、未認証に気付いている現状からは、認証の手順だけではなく、安全確認に対する認識や理解も重要であると考えました。

今回の調査を通して、認証システムの導入だけではなく、手順の必要性を十分理解し、確実に実践してこそ、安全な輸血医療につながると改めて実感しました。また、日々感じていた課題を調査によって可視化することは、現状を客観的に捉え、安全対策を考える一歩になることも学びました。今後も、現場で生じる課題に目を向け、輸血看護について共に考える仲間を増やしながらか、安全な輸血医療につながる活動を続けていきたいと思っています。

＜全国各地の合同輸血療法委員会＞

秋田県合同輸血療法委員会の最近の取り組み

～災害・救急医療への即応と多職種連携がもたらす地域医療の均てん化～

秋田大学医学部附属病院 輸血細胞治療・移植再生医療センター

奈良 美保

1, はじめに

秋田県は全国最高の高齢化率と人口減少に加え、広大な医療圏に医療機関が点在する地理的課題を抱えています。さらにツキノワグマ出没警報の発令（2025年度の見込み1万3,592件、人身被害67人）など深刻な地域課題もあります。限られた血液製剤の適正運用と安全な供給体制の均てん化は喫緊の課題です。当委員会（行政・赤十字血液センター・医療機関）では日常的な血液廃棄低減（Blood Rotation等）の推進とともに、最近では「超急性期・災害医療への即応体制強化」と「中小規模病院への多職種による技術支援」を両輪とした取り組みを展開しています。

2, 災害・救急医療への即応

2023年7月の記録的大雨被害を受け、2025年に「災害時輸血療法マニュアル（秋田県）初版」を作成しました。さらに災害時における輸血体制の確保・強化を図るため、広域災害救急医療情報システム（EMIS）の一部機能を活用した体制整備を検討しています。血液製剤の院内在庫状況等をリアルタイムで把握・共有し、秋田県や血液センターと連携のもと医療機関同士の迅速な融通体制の構築を目指して、2026年には県全体での災害訓練を計画しています。

3, 技師部会による「輸血管理部門訪問事業」と「認定検査技師育成の推進」

非常時を支える土台は日頃の確かな輸血検査技術です。しかし、2026年4月時点の県内の認定輸血検査技師は日本輸血・細胞治療学会のホームページ上では9人と東北最少であることから、検査技師部会では「訪問事業」と「人材育成」の二軸で輸血検査技術の向上を図っています。2019年より開始した中小規模医療機関への「訪問事業」では、部会員が直接現地へ赴き、チェックリストを用いて現場の実情に即した具体的な日常使用の器具・試薬環境での実技確認などを実施しています。また、認定輸血検査技師の育成・試験対策勉強会にも注力しています。本番さながらの模擬検体を用いた実技演習や手順の可視化・時間管理指導など、認定技師がマンツーマンで指導を行う体制をとっています。

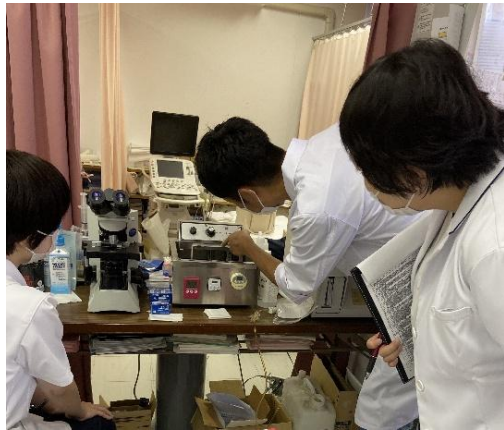


図1 輸血管理部門訪問事業

各医療機関へ実際に赴き、検査現場を視察、
実技確認などを行っている様子

4, 看護師部会による輸血看護の質向上と多職種連携

臨床現場の最終段階で安全を担保する看護師部会は2013年に発足し、それ以来学会認定・臨床輸血看護師等の育成、年2回の研修会、県共通マニュアル作成を推進してきました。近年はオンライン監査や他職種合同研修でのグループワークなど活動を広げ、医師・技師・薬剤師・看護師の連携によるインシデント防止に貢献しています。



図2 看護師部会研修会

輸血製剤の使用方法についての研修会の様子

5, 今後の展望

地理的制約があっても命を救う「仕組み」は進化させられます。システム整備と人材へのきめ細やかな支援が融合してこそ強靱な地域医療が成立します。秋田県合同輸血療法委員会としては、今後も地域に即した訪問事業などのフォローアップと県全体の多職種連携を深め、持続可能な地域輸血医療ネットワークを秋田から発信したいと考えております。

編集後記

第33回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウム開催にあたり、北澤会長と臨床検査技師の目黒様よりご寄稿いただきました。今回のシンポジウムで、離島輸血医療やアフエレーシス、移植細胞療法など小規模から大規模の医療機関を対象とした内容となっており、所属施設の規模では知ることのない内容や自施設と共通する内容など興味深く学ぶことができる内容と感じました。また、認定輸血検査技師更新必須講座ではAIHAについて講演いただきます。AIHA患者への輸血医療や輸血検査は輸血検査を行う臨床検査技師にとって重要な知識と技術です。正本先生、伊藤様のご講演を拝聴し学びたいと思います。

看護師の原様からは、輸血開始時認証についてご寄稿いただきました。認証システムは多くの施設で導入され患者誤認に役立っていますが、課題を可視化し安全対策の必要性が報告されています。

合同輸血療法委員会の報告は秋田県からご寄稿いただきました。近年、自然災害が多く発生している中で、災害時のマニュアル作成など活発な活動内容が紹介されています。

秋季シンポジウムでは皆様と共に学び交流できることを楽しみにしております。

(日高 陽子)



一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会

委員長

生田 克哉 (北海道赤十字血液センター)

副委員長

池本 純子 (兵庫医科大学病院)

委員(50 音順)

石井 洋子 (船橋市立医療センター)

北崎 英晃 (日本赤十字社北海道ブロック血液センター)

小見山 貴代美

鳥海 綾子 (慶應義塾大学病院)

長村 登紀子 (東京大学医科学研究所附属病院)

奈良 美保 (秋田大学医学部附属病院)

野崎 昭人 (横浜市立大学附属市民総合医療センター)

東山 しのぶ (奈良県総合医療センター)

日高 陽子 (東邦大学医療センター大森病院)

藤井 紀恵 (藤田医科大学病院)

藤田 浩 (東京都立墨東病院)

牧野 志保 (岡山県赤十字血液センター)

松本 真弓 (神鋼記念病院)

森山 昌彦 (東京都立多摩南部地域病院)

山崎 喜子 (茅ヶ崎市立病院)

山田 麻里江 (佐賀大学医学部附属病院)

吉田 雅弥 (熊本赤十字病院)

米村 雄士 (熊本県赤十字血液センター)

担当理事

池田 和彦 (福島県立医科大学)